

編集デスク <10>

冷房の季節になった。新聞紙の報ずるところによると、度を過ぎた冷房しすぎによって冷房病の発生が起こっているという。ついこの間も腎臓病が悪化して死亡にいたった娘さんのことが報じられていた。医歯大の島本教授は、はっきりと冷房のしすぎによる身体の調節機能のアンバランスによる死亡だと断言していた。冷房の完備したビルなどにつとめる女性にとっては、決して無関心ではいられない問題である。

暑い夏の間、温度や湿度が適当に調節されて、快適な生活が送れるならば、それは大いに能率向上に役立つし、仕事の成績もあがるというものだ。しかし、あまりに冷房の行き過ぎがあったりして、ストレスが身体を害ね、疾病を引きおこし、ひいては死者を出すようになると、これ

は問題である。

ことは、日本人の科学する心の不足に起因しているようだ。冷房機を作るメーカーに問題があるのではない。冷房機を設備する管理者に問題があるのでもなからう。冷房を適正に調節する取扱い者に問題があるであろう。そして、それを監督する者に問題があるであろう。今日の社会

冷房と科学心

長谷川 泉

に生きるためには、誰もが自然科学の知識を持たなければならない。電気、知識、器械器具の知識……、とにかく周囲の小さなどんなことをとりあげてみても、そこには自然科学の知識が要請されている。単に操作だけを知っていればよい、というものではない。その学理についても開眼が必要である。そうでなければ、冷房のし過ぎから病人を続出させ、

死者を出すことにもなりかねない。

冷房ばかりでない。暖房についてだって問題がある。電気暖房や、温水ないしスチーム暖房なら問題はない。しかし、ガス暖房など、直接に室内で燃焼させることによって温度を維持しようとする暖房については問題がある。燃焼するものは有害ガスを発生する。炭酸ガス、猛毒の一酸化炭酸がそれである。部屋は暖められはしても、室内に毒ガスを充満させては、いったいどういうことになるか、というのである。このようなことは、日本人の科学心のなさに起因している。一つのことしか考えないで、ものを総合的に見ることのできない思考の奇型に基づいている。

冷房の季節になって、思うことは、冷房のことばかりではない。もっと合理的に、かしくく生活するようになりたいものである。

の高さの低い人でも腰を曲げて作業しなくてはならない。腰を曲げて作業することは、疲労の第一原因である。結局ベッドを高い方の人の作業面高である54cmにあわせて、それから16cmの範囲が、ペダルとか、ねじで上下できるように工夫されてこそ、肘一床面の高い人も低い人も、楽な姿勢で作業のできる作業面高が得られることになる。

現在のままのベッドを調節するとしたら、40cmのベッドは30cm、45cmのベッドは25cm、48cmのベッドは22cm、55cmのベッドは16cm、自由に動かせるようにしなくてはならない。

このように、ベッドの高さは自由にその高さが変化できると便利なのであるが、これはあくまでも看護する立場からのことで、患者の希望も十分に考慮しなければならない。ベッドの上で養療生活を送る患者は、床に臥しているときの方がはるかに多いため、それほどベッドの高さに直接的な不満はないかもしれない。それだからといって、看護する者の都合のみで、ベッドの高さを決めてしまっていていいかどうか、はなはだ疑問である。

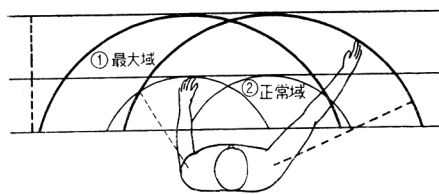
たとえば、温度（室の天井の方が高く床の方が低い）、湿度、塵埃、騒音、これらの環境の因子も考慮された上で、ベッドの高さは決められなくてはならない。

私の研究したかったのは、主に看護婦の疲労度から考えたベッドの高さであって、肘下尺から観察したのであったが、これらに付随する条件が出て来るのは当然のことである。

とである。

もうひとつの重要な因子について述べてみよう。

それは作業域の問題である。それにはまずベッドの幅、人体の指極と前方腕長の測定が必要になる。とくに前方腕長の測定結果から、ベッドの幅、ベッドの上の患者の位置が考えられるのである。



- ①最大域—肩を中心にして上肢全体が水平面上で到達しうる最大運動範囲
- ②平常域—上膊を自然の位置で軀幹部に接している時に前膊が水平面で楽に達しうる運動範囲をいう

作業域が決められるのには、この図が示す上肢の姿勢が基準となる。

第3図 水面作業域

説明すれば、動作経済の原則の中には、「手の運動は仕事満足に出来さえすれば、最小限度の運動に止むべきである」というのがある。なるべく上肢の先の方で、作